

## 坐に先立つて

みなさん、法のためによく集まられました。坐禅はたびたび申し上げておるように、一つ事に成り切つて、自己無きを証する事が眼目です。本当に成り切つたら、一つというものもなくなり、一切が自己として現成する。その消息を体得するのです。これだけは我々の考え方じゃなくて、本来がそうです。だから、考え以前の純然たる本来の道を体得するための坐禅ですので、知的計らいを一切止めて、一つことを馬鹿になつて一生懸命やつて下さい。その事に徹すれば、その事がその事の真相を知らせてくれるのです。歩くなら歩くばかり。噛む時は一噛みだけ。勉強の時は勉強だけ。坐禅だけ。呼吸のみ。その時、それに一生懸命になつて、我を忘れておればそれで結論が出るのです。このようにして、その事のみを単を練るのが生きた修行です。簡単にいえば、今ばかりになる。一呼吸だけになる。坐禅だけになるのです。雑念が出ようと、煩惱が出ようと気にすることは無いのです。要は徹する事です。徹する事が大事なのです。

坐禅は禅定を練る事が原則です。禅定とは自己の無いことです。「今」「只」です。法の俣に言うことです。心が乱れ拡散する、この心の癖を離れること。これらの癖を取るには、心を一点に置くことです。一点に置くためには、素直になつて単純な事に没頭すること。意識の計らい事で鎮めてやるうとしても出来るものじゃないのです。単純な事を単純なまま、繰り返しておればいいのです。注意深く、丁寧に、一つ事を繰り返しておれば、自ずから、整つてくるのです。整うに従つて動くのものがなくなるから、自ずから身心一如になり鎮まるのです。本来そうなるようになっていくのです。たったそれだけの事です。それを何とかしようと、意を運んで計らい事をする、知性はあらゆる働きを展開して無限大化し、いよいよ惑乱します。この動きを繰り返しますから訳が分からなくなるのです。

それで馬鹿になり、昆虫のように単々と「只」やりなさい。つまり一つになる事を禅というのです。単純になる事。馬鹿になる事。これを徹するとも言つのです。要するに一つ事に、自己無く素直に、何でもすることです。

聞いて、覚えて、賢くなる事と違つのです。聞いたままを実行して、その人になることです。呼吸でも食事でも勉強でも、人にやつてもらえないと同じように、分かつたからといって、一息一息になれず、そのものに徹することは出来ないのです。ひたすら「只」することです。体得以外にないのです。徹するために一生懸命「只」するのみです。何か不純物というか計らい事というか、そつした徹し切れずに残つた意識の端くれが、あつちへ行つたり来たりして知性を色々に突いて騒がせるのです。そんな余地が無いほど、残りものが無いほど一生懸命吸つて、一生懸命吐いておればいいのです。さすれば自ずから「今」になり自己が取れ隔てが取れるのです。ここは素直に信じて、無我夢中になつてやってください。没頭する事。陶醉する事。徹する事。成り切る事。三昧とも言つのです。無我の事です。天上天下唯我独尊と言つのと同じです。唯一にして宇宙大であり、余念も邪念も煩惱も無いからです。出来るだけ早くそこへ到達した方がいいですからね。ですから、我を忘れて、無我夢中であつてください。では、坐禅しましょう。「只」坐禅、「只」呼吸ですよ。

## 正法眼蔵 有時 提唱

有時、仏性、現成公案の三巻は、正法眼蔵中最も難解とされています。しかし空に二つ無く、今に二つ無い。つまり真実はそのもの以外には無いし、道には難易は無いのです。言葉の外の世界であり理屈を離れた如実の事柄ですから面白いのです。特にこの巻の希望者が多かったので、有時から始めます。

ご承知のように道元禪師は、余りにも頭脳明晰で、有り余った知識と、そして哲学的思考系が非常に発達した方ですから、ついぞ慈悲から説明が豊かに、且つ丁寧を究めています。そのために使われている語句は非常に精緻であり多彩ですから、それだけ魅力的なので言葉に取り付き易いのです。多彩な語句を理解するために勉強をしまい、一生を掛け眼蔵学者で終わってしまうのです。

碧巖録が雪竇禪師と圓悟禪師によつて完成されました。しかしながら、それが非情に良く出来ていたため、圓悟禪師の弟子である大慧禪師が、その板を焼き捨てました。これにおぼれる者が多数出て、本當の修行の妨げになる、と言つ理由からです。これも大きな慈悲です。この正法眼蔵九十五巻も、その感無きにも非ずです。これを焼く熱烈な師がいなかったことは、大法にとつて良かったが悪かったか。日本人の氣質として、立派な宗祖の片鱗は全て伝えようとする。これが日本人の優れた民族性です。けれども如何せん、その精緻を極めた語句に取り付かれて、一生涯本道に一步も入れなかった人には実に気の毒なことです。

今からこの有時の巻きを紐解きます。出来るだけ詳しく、且つ言葉に囚われないよう端的に説いてみましょう。

### 本文

「古仏言、有時高高峰頂立、有時深海底行、有時三頭八待、有時丈六八尺、有時麈杖松子、有時麈柱燈籠、有時張三李四、有時大地虚空。」

いはゆる有時は、時すべにこれ有なり、有はみな時なり。丈六金身これ時なり、時なるがゆゑに時の莊嚴光明あり。いまの十二時に習学すべし。三頭八待これ時なり、時なるがゆゑにいまの十二時に一如なるべし。十二時の長短短促、いまだ度量せずといへども、これを十二時といふ。去來の方跡あきらかなるによりて、人これを疑着せず。疑着せざれども、しるるにあらず。衆生もとよりしらざる毎物毎事を疑着すること一定せざるがゆゑに、疑着する前程、かならずしもいまの疑着に符合することなし。ただ疑着しはらく時なるのみなり。われを排列しおきて尽界とせり、この尽界の頭頭物物を時時なりと懸すべし。物物の相礙せざるは、時時の相礙せざるがごとし。このゆゑに、同時発心あり、同心発時なり。および修行成道もかくのごとく。

われを排列してわれこれを見るなり。自らの時なる道理、それかくのごとく。恁麼の道理なるゆゑに、尽地に万象百草あり、一草一象おのの尽地にあることを參学すべし。かくのごとく往來は、修行の發足なり。到恁麼の田地のとき、すなはち一草一象なり、会象不会象なり、会草不会草なり。正当恁麼時のみなるがゆゑに、有時みな尽時なり、有草有象ともに時なり、時時の時に尽有尽界あるなり。しばらくいまの時にめたる尽有尽界ありやなしやと観想すべし。

しかあるを、仏法をならはざる凡夫の時節にあらゆる見解は、有時のごとばをきくにおもはく、あるときは三頭八臂となれりき、あるときは丈六八尺となれりき、たとへば、河をすぎ、山をすぎしがごとくなり。いまはその山河、たとひあるらめども、われすぎたりて、いまは五殿朱樓に処せり。山河

とわれと、天と地となりとおもふ。しかあれども、道理この一条のみにあらず。いはゆる、山をのぼり河をわたりし時にわれありき、われに時あるべし。われすてにあり、時さるべからず。時もし去來の相にあらずば、上山の時は有時の而今なり。」

本文の冒頭、ここに道元禅師の言いたいテーマが投げ出されています。

「古仏言、有時高高峰頂立、有時深深海底行、有時三頭八侍、有時丈六八尺、有時屈杖弘子、有時露柱燈籠、有時張三李四、有時大地虚空。」

つまり道元禅師は、古仏の是の言葉に触発されたのです。この古仏祖師は、六祖下三世の薬山威嚴禅師です。この弟子に雲巖曇晟、その弟子が曹洞宗の祖・洞山良价禅師です。

六祖下二神足の一方、南嶽懷讓禅師から馬大師、そして百丈禅師、その子が黃檗希運禅師で、その子が臨濟大師です。天皇道悟禅師を兄弟子に持つ薬山禅師はこの頃の方で、当時は南泉、盤山、石鞏、大梅、鹽官、匠山、趙州、長沙、そして仰山、香巖、巖陽、天龍、等々の英傑が俄に現れた時です。天皇に引き続き竜潭、そして徳山が現れる時だったのです。

仏教到来まで支那大陸には、儒教道教等、四書五経が百花繚乱期でした。が、そろそろ論理的限界を迎え飽きが出て来た時、仏教が鳩摩羅什や玄奘三蔵等によって翻訳され導入されました。これが思想的文化的に大刺激となったのです。翻訳されて書物としての仏教は、当然行き渡っていました。そこへ論理を超えた禅が達磨大師によって伝えられた為、所謂カルチャーショックは絶大でした。それまでは知性の範囲を超える事はできず、どこまでも理論であり理屈です。説明の世界に留まっていましたから、釈尊が摩訶迦葉に以心伝心した消息は、禅定を錬る事によって体得する事が出来る。と言うフレーズは強烈だったようです。

無自性とは何か。空とは何ぞや。祖師西来意とは何ぞ。是れを坐禅によって体得するという身心一如の行は、全く新しい意識へと誘うものでした。これらは全く支那に於いて形成された、今までの仏教書籍等の形体ではない、これこそ禅固有の形で、文化として秀才達に受け入れられて行ったのです。

達磨大師（不詳〜530説）より凡そ百七八十年近く経て六祖（638〜713）の時代を迎え、それから三四世代経つと更に百年すすみ、一般に布衍していく時節を迎えたのです。禅門を叩く人が増えてくる。初めは一粒種だったものが、学道の土が十倍百倍千倍になってくると、やはり芽吹きも十倍百倍千倍になってくるのです。丁度それが始まった時です。祖録を賑やかし貴重な南針を垂れている祖師方の何と多いこと。この時の祖師方です。

この薬山禅師（745〜828）の語句を日本人の道元禅師（1200〜1253）が、凡そ四百五十年隔てて読んだのです。普通なら、有時高高峰頂立、有時深深海底行云々というような言葉に触れても、成る程そうか、祖師方は上手い事を言うなあ、で済ませるんです。が、そこから始まるのが道元禅師です。有り余った知識と豊富な表現力が慈悲となり法となって進みます。私がおう一つこれを深めて、詳しく解りやすく説いて聞かしてやるう、となったのです。だからこの一句がなかったら、有時の巻きは生まれなかったのです。時を語ったとしても随分と違ったものになっていた筈です。それ程、道元禅師にとってこの言葉が刺激的であり惚れ込んだと言つ事です。

日本曹洞宗開祖の道元禅師、渾身の熱誠を振るって薬山禅師をさらに深く大きく輝かし、躍動せしめて大法を伝えようとされた慈悲は、やはり道元禅師ならではです。

さて本文に入ります。この「有時」という語句がしばしば出てきます。「有時」の読み下しを見ると、「ある時」と訳しています。英語で言えば at one time です。「ある時」じゃないんですよ。「有時」は「時そのもの」。つまり端的です。「今そのもの」のことです。それ以上説明できないそれ自体の事で

す。だから「時すでにこれ有なり」とあるのです。

つまり、如何なる物も今でないものがあるか、時でない物が有るなら出して見せよということ。何も無いでしょう。水の今がある、空の今がある、木の今がある。鳥の今がある。生まれつつある今。死につつつある今。壊れつつある今。作られつつある今。即ち今とは全宇宙ということ。だから今度は「有はみな時なり」と。これが結論です。何時も言っているように、今しか無いし、今でない物は無い。今は有りながら有りつづれ。山河大地です。山川草木です。有って無い、無くて有る。又作用・働きであり因果そのものです。存在が有時であり法ということ。これだけ前思想があれば良く分かる筈です。

さて、本文に入ります。

### 「古仏言、有時高高峰頂立、有時深深海底行、」

山の頂上に立つ。何時も山頂です。即今この時、高高峰頂立です。今、此処が一番の頂上です。今と比較できない絶対世界です。此処もまた宇宙で唯一です。此処は最も高い頂です。その力が我々にあるのです。一呼吸自体がそれです。坐禅がそれです。無二無三にして唯一の絶対世界です。そのものばかり、その物自体は常に絶対です。次も同じです。今、深い海底を行く。今此処が最も深い処です。比べる物が無いのだから一番深い海底です。これが仏法です。これが仏性です。これが有時です。どうあるうとも因縁所生の法であり今の様子です。これを体得するのが禅修行です。今、その物自体になつて隔てを取れよと言つ事です。

### 「有時三頭八待、有時丈六八尺、」

これも同じです。三頭八待は三つの頭と八本の腕を有するとは怪物のこと、丈六八尺は仏の別称です。どちらも置物であり仏像です。怪物であろうと仏であろうと、そのものそれよ。見る底、聞く底。いちゃ完成している今今の様子であるぞと。次も全く同じです。

### 「有時窟杖松子、有時露柱燈籠、」

窟杖も松子もその物自体今の様子であり、道路端の立木や燈籠もその時の今だ。全て自分の様子であり分身ではないか。「隔たり」があればこの真相が分からぬ。分かるための努力が要るのは当然です。真意は次も同じです。

### 「有時張三季四、有時大地虚空、」

張三季四は日本でいえば太郎さん、花子さん。ありふれた人の名前で、誰も彼もみんな、一杯一杯の今であり世界です。どんなに広い天地自然、大地虚空であつても今である。つまりありとあらゆるもの皆、その時の今の様子です。

### 「いはゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり。」

「有る」全ての物の存在は即ち「処、空間」を占めている。だから「時」でもある。大事なことは、物も時の縁に依つて生じた姿で、それ以外の何者も無いのです。縁の物だから、縁次第です。縁が尽きれば消滅する代物です。存在とは時間と空間を有するが、しかし時とか時間というものはないのです。全く觀念上のものです。全ては流転に拠る「今」です。無常故の活動体と言つ事です。だからそれらを概念化し情報化して、物と時を別々に見ることは間違いだと言つことです。

これだけを見ても哲学を超え観念世界を超えていることがよく分かるでしょう。時間を横から眺めれば過去・現在・未来と言つ事は出来るし、時計で過ぎた時を数値にする事が出来るし、又未来の時間予測が出来る。しかし実体は「今」が過ぎたものを過去と言ひ、未だ来て無い「今」を未来と言つていただけです。過去は既に無く、未来は未だ現れていない。無いのだから計測のしようが無いでしょう。「今」しか無いのです。だから今も時も時間も、それ自体を掴み出すことの出来ない、無くて有る、有つて無い世界です。従つてその真相を確かめる方法は、その物自体になつて初めて自覚されるのです。要するに自己を忘れることです。それが見性です。

ついでですから言つてしまひますが、無常だから物も働きも作用も有るのです。「今」の活動自体の事です。この「今」の様子と活動自体を「有時」と言つのです。精神的な働きを見るとよく分かるでしょう。考えたりする知的作用も、感動したり祈つたり、尊敬したり意志決定する。これはもうその時限りの様子でしかないものです。しかもそれ自体は瞬間の事柄ですから、分かる分からないを超えているので、知りようが無いのです。その後で存在を証明することは出来ないが、けれども明らかに有つた事を知る。これが人間の限界なのです。過ぎた跡形を捉えて問題視しているのです。だから幻を幻だと知らないから実在と信じてしまつ。これが囚われであり迷ひです。有時とは今今の様子であり全ての本性です。空といつと同じです。

この言葉に道元禅師がぞつこん惚れ込んで、そこで一ひねりやつたのがこの「有時」です。俺の有時を聞かせようぞ、と哲学的な論法を用いて、無い「今」を説き、有る「今」の様子を説いていくのです。氣を付けなければいけないのは、言葉に着いて廻らないことです。特別な事ではないと言つ事を知らしめる為の言葉が、言い回し方と語彙の多さで訳が分からなくなりませう。要するに、全て「今」が存在であり、而も仮の物でありながらそれが真相なのだと言つているので、更に深遠な法理が有る筈だなどと思わぬことです。

### 「丈六金身これ時なり、」

仏も時。我々もそうじゃないか。時に引つ掛からぬ事です。

### 「時なるがゆゑに時の莊嚴光明あり。」

時はいつも時だから、縁に依つて無限の姿を現する。このことを「時の莊嚴光明」と表したまでです。従つて決まつた姿や様子は無い。我々自身、口も有れば眼もある。手も足もあつてそれぞれの作用に従つて色々に現れ、今を無限に謳歌している。これが莊嚴光明です。宇宙そのものが有時の莊嚴です。莊嚴とは絶大なる輝きであり飾りと言つ意で、全て言葉の綾です。

### 「いまの十二時に習字すべし。」

「いま」が字眼です。「いま」しか無いのに、十二時が有るといふのは一体どうしたことだと参究するのです。十二時は二十四時間。一日中の様子です。身近にいえば朝起きる。大小便をする。食事をする。歩く。働く。喋る。感ずる。等々。一切合切、どれもみな有時の様子です。この「今」「今」「今」の様子を習字せよと。

仏道を習つというは、自己を習つなり、とあるでしょう。即今底を見失つなと言つ事です。今を離れたら道ではないし法と隔たる。一日という時間が有るのじゃない。今しか無い事を自覚せよ、と言つのが「いまの十二時に習字すべし」です。希道曰く、有時是れ無時也。無時全く巴鼻無し。説き過ぎ説き過ぎ。

### 「三頭八待これ時なり、」

そんな怪物の像も時である。然しながら時は怪物にも仏にも関わらないのです。何となれば、時は姿も形もなく、掴みようもなく留める事が出来ないからです。時は何でも生み出すが、時は生まれる事もなく滅する事も無いものです。これが有時の真相です。

### 「時なるがゆゑにいまの十二時に一知なるべし。」

どんなことも畢竟、時の様子であり、今の出来事です。出来事とは過ぎ去り転変して留まらないものです。一日という時も矢張り今無くしては有り得ない。がまさしく過ぎてしまえば何も無いのが一日です。一生もです。一生と雖も忽ち過ぎて夢幻です。ですが、「今」には変わりは無く、一日に変わりは無く、どこまでも時は過ぎ去りながら、何処へも行かないものだ、と言つ事です。

### 「十二時の長短短促、いまだ度量せずといへども、」これを十二時といふ。」

一日がどれほどのものか。長いのか短いのか、多いのか、少ないのか。今今だから測りようが無い。計り知ることは無いけれども、人は皆これを十二時と言ひ一日と言つている。我々自身が時そのものだから、時を知るとか知らないとかに関わらない。長短にも関わらない。我々そうでしょ。自分であることを知った時にはもう生まれていた。生まれる時も、生まれる前の時も知らない。知った時にはもう目覚めておる。面白いでしょ。じゃ、夜はどれほどの長短があつたんか。眠つておるそのものが時だから長短は無いし、その事すら分からない。時計があるから時の計測は確実に出来るじゃないかと言いたい筈です。それは時計の機械的な時であつて、時その物ではないのです。時計が有つても無くても、時計を早く廻そうと逆に戻そうと、今は今です。一日は一日です。時とは、一日とはそう言つものだと。

### 「去來の方跡あきらかなるによりて、人これを疑着せず。」

去來とは過去です。過ぎ去つた跡形が結果として現れているので、確かに有つた事が分かる。朝起きて、ご飯食べたじゃないか。あそこまで行つて用事を済ませ、あの人と逢つて良く頼んできたから安心、などと振り返つて自分のして来たことを知る事が出来る。だから今が分からなくても人は十二時と言つ時が有ると思つていて、過ぎ去つて行き、何も無いのに、時が何なのか疑つてもいい。これは昔も今も同じですね。

### 「疑着せざれども、しれるにあらず。」

疑つてはいないけれども、だからといって本当に今が十二時であるという事を知っているわけではない。勿論法の上から言えば、日常有時そのものになつておる時には、それ自体だから知る知らないを超えている。だから向上底から言えば「しれるにあらず」が本当です。今はそれ以前の様子を言っているのです。本当に知るからこそ今が確固とした自覚に基づいた「今」となり、本當の「今」に目覚めるから決定的な安心が得られるのです。つまり、「今」ばかりで前後も何も無くても、自在に作用し活動しているそれ自体を体得する事が大切なのです。その為の坐禅であり修行です。

### 「衆生もとりしらする毎物毎事を疑着する」と一定せざるがゆゑに、疑着する前程、かならずしもいまの疑着に符合することなし。」

ここらが道元禅師一流の論法です。ちよつとでも引つ掛かると分からなくなる言い回しですから気を

付けて下さい。実は簡単な事を言っているのです。

毎物毎事とは、今今のあらゆる様子のことです。凡情に遊んでいる一般の人々は、言うまでもなく自分の全ての出来事に少しも気が付いていない。本当に生きていないから疑問にも思おうとしない。時が何たるかを知らなくても色んな事が何時も何時も起こっている。事によって囚われたり悶着が起きたりする。時が違い縁が違つものだから、今の状態も様子も皆違い、一つも同じ事が無いのが当然です。それを筋道を立てて何とか纏め整理しようとするが、色々思う事が錯綜して、それ故に定めが着かない。というのが「疑著すること一定せざる」です。

そのうえ時は少しも止まらないし待つてもくれない。だから決して納得が得られない。つまり今の事実と、思いとが隔たつてズレを起こしているから、納得一致する事が無い。その為にか得心する別の「道」「法」が有るのではないかと疑問に思い探しては見るのだが。これが「疑著する前程」です。前程は別の「道」「法」のことです。

徹底し納得するまで「道」「法」を追究しないから、悶着がどうしても決着しない、と言うのが、「かならずしもいまの疑著に符合することなし」。

その本は無努力による無知と言う事です。「今」しか無いということを知らないし、時というものは生物で、その時、その事をしておかなければ、必要な結果は現れない、と言う事が本当に分かっているから、その時、その事が分かっているなら、すべき時にしなかつた自分に非があるので、如何なる結末であろうと、それがその時の様子としての自分に納得出来るのです。衆生とは先ず以てそのような過ごし方だから、何時までも惑乱し葛藤するのだとの底意です。

もしこの事が分かっているなら、すべき時にしなかつた自分に非があるので、如何なる結末であろうと、それがその時の様子としての自分に納得出来るのです。衆生とは先ず以てそのような過ごし方だから、何時までも惑乱し葛藤するのだとの底意です。

**「ただ疑著しばらく時なるのみなり。」**

ただ疑つたり無納得であっても、その心は確かに実際であり、時そのものであると。自由な働きをする心だから、心に於いては時に違いない。縁に依つて生じたその心は、別の縁に依つて直ぐに消滅するので、ほつておけばよいのです。だから生じた心を問題にしなければ、そのまま「道」「法」です。これが有時の当体です。この辺りで、道元禪師の真意がよく見えてきたでしょう。

**「われを排列しおきて尽界とせり、」**

われを「排列しおきて」とは、色々な事を感じたり思ったり、行爲した全てのわれを遣い尽くして、と言う事です。釈尊は、「三界唯一心造」と言われた。心なくしては世界は無いのです。我れと同事と言つことです。「排列しおきて」とは、分かりやすく言えば見聞覚知、眼耳鼻舌身意、即ち自分を用い尽くしているこのことが尽界である、全てだと言つ事です。それ以上何も無いでしょう。

見てみなさい、誰もが眼に拠つてこの世界がちゃんと有る。他の耳鼻舌身意も皆同じです。どこにも自己とすべきものなど無く、宇宙と同化していることを別の言い方をしたのです。だからこれを「尽界とせり」。今、われわれのこのままが全てである。これ以外の世界は無いではないか、と言っているのです。「隔たり」が有るから引つ掛かり、是の様子が分からないだけです。

**「この世界の頭頭物物を時時なごすべし。」**

頭頭はいちいち、それぞれの意。物物とは全ての物、あらゆる存在の事です。縁のことです。縁でない物は無い。頭は伺い知ることです。自分の見聞覚知に催されるあらゆる物は、全て時であることを知れよと。分かりやすく言えば、見る底、聞く底、思つ底。いちいち時時完成成仏底であるぞと。簡単

に受け取る事です。大事な事は徹し切る事ですから、見る底、聞く底、思つ底です。「只」行ずる事です。本当に今に目覚めよと言つ事です。

### 「物物の相礙せざるは、時時の相礙せざるが「今」。」

物と物とそれぞれが妨げあいをしていないのは何故か。茶碗と箸とが喧嘩しないのは何故か。縁が違うからです。縁が違うと処が違い作用が違ってくる。おのおのが独立独歩だからです。丁度、時と時とがぶつかつたり重なりあう事が無いのと同じだと。今は今ばかりで、今に二つは無い。時時成仏しているのです。

今という今なる時はなかりけり 「ま」の時くれれば 「い」の時去る

です。絶対に物と物、時と時が衝突し混乱する事は無いのです。だから宇宙は完全平和なのです。何時も「今」、一つに治まっているのです。一つに自己は無いのです。どれもこれもではなく、一つなので。是れを大円鏡智と言つのです。人間が観念を以て捉えるから、あれとこれとが生まれ、どっちが良いとか悪いとか、価値が有るとか無いとかが始まり、損得欺瞞（まがま）云々するから戦争が起こるのです。仏と一心のことです。一心は無心です。一つです。「隔たり」が無いから宇宙大です。これ以上の「道」「法」は無いので、完成と言つ事です。要するに物であれ時であれ、自然は自己が無いから、妨げ合う事は無い。これが「道」「法」であり、有時です。

### 「このゆゑに、同時発心あり、同心発時なり。および修行成道もかくの「今」。」

悲しい時はどんな慰めも馳走も関係ないでしょう。宇宙総ぐるみで悲しいからです。嬉しい時も心配事もです。宇宙相随来也（さいらい）ですから、だから常に一挙一動が宇宙大で、因果を眩（くら）ます事は絶対に出来ないのです。指を立てれば宇宙が振動するのです。一喝すれば天地が粉微塵になるのです。故に心を用いれば同時に尽界発心です。これを同心発時とも言つのです。しかも誰が、何時、どのように心を用いても、時や物と同じように決して衝突は無いし、重なつて迷惑したりする事は無いのです。宇宙大の心だから同時であり同事です。同心発時です。一真人の発心は宇宙を救済するの道理が分かるでしょう。

大智老尼曰く、「常度宇宙如是法（つねにうちゅうをどすによぜのほう）」とはこのことです。その道人を諸仏諸菩薩が擁護しないはずがない。いつも有時の様子。その時、その時の心の様子であつて、それ以外には何も無いのです。このことを南泉禅師が「平常心是道」と一句で結論を出したのです。

こういう事ですから、みなさん、悲しいことも辛いことも、逃れようとせず、縁の俛に、有時のままに、誠心誠意で「只」対処して跡を残さぬ事です。良寛禅師のいわれたように、「災難に逢う時節には、災難に逢うがよく候。死ぬ時節には、死ぬがよく候。是はこれ災難をのがるる妙法にて候」とあるでしょう。死ぬしか無い時は生きようと思わないことです。尽界ですから、それしか無いのです。一つです。これが「道」「法」です。従つて尽界と一つになる事が生死を越える事です。成り切つて自己の無い事です。一呼吸に徹しきつた力です。死というものを観念や言葉で捕らえてしまうから、尽界から離れるのです。自己が発生すると、未だ生きたいという思いが発生し、出来ない事をしようとする願いが現れるから苦しむのです。当然心に生と死が対立して葛藤するということです。生の時は生の尽界、死の時は死の尽界。だから「今」「今」そのまま、そのまま。これが「道」「法」だからです。「今」「只」です。

分かりやすく言えば、生きている今、死ぬ今、往来の今、喫茶喫飯の今等々、縁が無限だから、当然ながら無限の今が有るでしょう。でも「今」はそれらの一切と関係無いでしょう。だから死のままであれば死は無いと言つことです。どんな心が起こつても遭遇した何事も、そのままが今の様子であり、「道」「

「法」なのです。従って自己を計らいさえしなければ衝突するもの、迷うものは一つも無いのです。ですから本当に修行する時、宇宙同事ですから、「道」「法」に行き着くのです。同時発心、同心発時とはこのことです。即今底以外に何も無いのですから一呼吸の宇宙です。即今底即成仏です。これを成道とも言つのです。「および修行成道もかくのごとし」です。何も言つ事も思つ事も、追究する世界も無いと言つ事です。修行も成道もみな今しか無いということですが、このままが仏法であるという覚証を得るのが目的ですから、「今」に徹すれば「道」「法」の真相に達し、有時の人となるのです。

**「われを排列してわれこれを見るなり。」**

自分の日常二十四時間の活動全体、自分のそうした全ての様子を自分で知ることです。今今活動しつつ、何一つ留まっていないが、活動している事実。手を出す時にはこれだけしか無い。握る時には握るしか無い。持つてくる時には持つてくるしか無い。食べる時には食べるしか無い。この活動体の今の様子しか無い。その時その場の自分、あれもこれもしているが、それらをしている様子しか無い。つまりあれもこれも、その時、その時と言つ具合に見ずに、何時も「今」それのみ。一つのみ。縁のみ。このことを知りなさいということですが。

**「自分の時なる道理、それかくのりやう。」**

活動しつつ次々に転じていく。その時それしか自分は無い。何時も時ならぬはなく、自分で無い時は無いという道理が良く分かるであろう。時を妨げる物は何も無いし、自己を邪魔する物も無いぞ。見てみよ。聞いてみよ。何者か汝を妨げん。いつも自在にやっているではないかと。

**「恣魔の道理なるゆゑに、」**

これが「道」「法」だから。

**「尽地に万象百草あり、」**

見聞覚知、至る所、時に従い縁に従つて山川草木有りです。それぞれの時を現じて万象ありです。全体時の莊嚴であり、時を遣い尽くしている様子、山川草木悉皆成仏ということですが。

**「一草一象おのの尽地にありことを參學すべし。」**

一本の草も瓦のかけらも全て各々絶対の様子であり、だから手が付かぬ。汚す事も侵す事も出来ない。これを尽地という。自己無しと言つ事です。參學は成り切つて究める事で、本来にそのものに参じてその物を知りなさい。徹して自己を忘すれば皆分かると言つ事です。

**「かくのごとくの往来は、修行の発足なり。」**

往来は道理で、発足は始まりです。お茶を飲んだり食事をしたりする日常全体が「道」「法」であり、この当然の道理が修行の心得であるし、初めであり、又急所でもある。この大切な修行の着眼を離してはならない。即今底の参究しか無いぞということですが。

**「到徳魔の田地のとき、すなはち一草一象なり、」**

「今」「今」「今」自己無き様子が「到徳魔の田地」です。見るまま、聞くまま、即一草一象が自己ではないか。自己ならぬ物は無いと言つ事です。

「会象不会象なり、会草不会草なり。」

有ったり、無かったり。分かったり、分からなかったりと、人間の色々な思いとしての現実がある。こういった一切の心の問題が有るけれども。

「正当恁麼時のみなるがゆゑに、」

正当恁麼時とは、まさに是の如き様子です。今ですよ。みなさん、今こちらを向いている。今のこの様子は、私が見なさんに成っているのです。皆さんは私になっている。瞬間瞬間、手続きなしにパッとその物に成っている。この様子を「正当恁麼時」と言つのです。自然に既に有る様子。何時でも、何処でも、誰でも、「今」きちつと有る様子。これが「道」「法」です。このままにしておくのが修行の要点です。「口」「心」が正当恁麼時ですよ。既に「道」「法」のみだから、という意味です。

「有時みな尽時なり、」

今、既に時を遣い尽くしている。これを尽時と言つのです。

「有草有象ともに時なり、」

重ね重ねで説く必要は無いですね。草も石ころも時です。

「時時の時に尽有尽界あるなり。」

時時の時とは、今、何処もかしこも今。時ならぬ時は無い。時に拠つて人も物も、作用も活動も有る。この世界全体がそうだ。これを有時というのだと。西洋哲学には時間と空間を一緒にした概念は無く、それに相当する言語も無いでしょう。禅はこういふ事を実に自在にピシヤリと言つてしまいます。つまり有時で片付け、今で片付け、空で片が付くからです。語句の外の消息は語句に拠らないからです。これが仏法であり仏道です。歩くも仏性。坐るも仏性。であるから、尽界みな仏性。尽界即有時ということです。込み入った言葉に用はないのです。

「しばらくいまの時にもれたる尽有尽界ありやなしやと観想すべし。」

今でないものがあるんなら、出して見せよ。と言つ訳です。見るも時、聞くも今、これを尽界と言わずして何ぞや、と。虚空とか尽界とか尽地とか、言葉に置き換えたらきりが無い。畢竟有時と言つならば全部有時であり、無と言つなら全部無です。仏性と言つなら全部仏性じゃないか。このことを自覚しなさいと。

「しかあるを、仏法をならはざる凡夫の時節にあらゆる見解は、有時の「ことばをきく」おもはへ、」

これはもう皆さん分かりますね。こういふ真実の法を聞いたことの無い人の理解はと、「道」「法」の人と迷いの人とを明確にするところです。時の変化というものを認めてしまっているので、始めがあって、終わりがあって、こう流れていくぞと。「いついつ風」初めから物を相手として認め囚われていて、その流転としてとらえるである「いつ」と。有時を「ある時」at one time と「あるに違ひない」といついつとです。これは全く違つのだ、との布石です。

「あるときは三頭八臂となれりき、あるときは丈六八尺となれりき、」

本来その物のみです。その時だけです。「今」が有時であり尽界です。「薪が燃えて灰になるに非ず、薪は薪の法位に住し、灰は灰の法位に住す。」が良く分かるでしょう。だから、「今」そのものは、常にそれでしかない。あれが有り之が有り、それがこうなって、あれがあのようになつていくと、知性で時間の経過や姿を想像し、仮想世界を自分で作った上から捉えようとするでしょう。

従つて、あるときは三頭八臂となつたり、丈六八尺となつたりするし、などと考えるだろう。それは自己を運んで相手を立てての理屈だから、それは大変な間違いです。その本が「隔たり」から起こっている事を知らねばならないぞと。

**「たとへば、河をすぎ、山をすぎじがごとくなり」と。**

これから凡夫が考えるであろう例えを上げて、有時そのものと、単なる理屈との違いを論攷して、隔て有るが故に過ちを犯していることを知らしめるのです。

例えば、川を渡り山に登つたりする。そういう動きを先ず認め、いちいちそれらの動きを固定した事実として捉えるので、たまたま河を渡り山を通つてきたと思つたろう。

**「いまはその山河、たとひゆるゆるめども、われすぎたりて、いまは玉殿朱楼に処せり。山河とわれと、天と地となりともさぶ。」**

偶々たまたまそうした山河が有つたために、自分はそこを通つて、そしていまは玉殿朱楼に辿り着いた、という風に理解するだろう。それは山河大地いちいちを認め、囚われているからだ。真実と隔たつての見方なのです。どうしてもそつという風に自分の念を起こし、自己を計らつて見てしまふ。それは本当の今が分かつていないからです。歩いている自己がある。今、川を渡っている自分がある。今度は山へ来たぞ。通り過ぎたぞ。ようやく家に辿り着いたぞ、という自分があるために、跡形がずつと残つていくではないか。これが囚われです。本来今しか無いのに、相手を認めると、どうしても心に過・現・未が生じて問題を起こすのです。それはそれなりの理屈が有るにせよですよ。

**「しかあれども、道理」の一条のみならず、」**

そうだとしても、道理はこれだけじゃ無い。本来の「道」「法」が分かれば、そのような間違いは起こらないのです。

**「いはゆる、山のほり河をわたりし時にわれありき、」**

さあ、ここが大事なところです。ここが本当に分かつたらいいのです。山に登り河を渡る時の一歩。この事実。その時限りのわれである。他にわれは無く、時も無いのです。これが「道」「法」であり、有時の真相です。

**「われに時あるべし。われすべからず、時なるべからず。」**

もう何も云う事は無いですね。というのは、何時もわれですから。自然と出会い、物に出会い、人に出会う。全てわれの時です。われに時あるべし。物に時あるべし。時はいつも時です。来る時も無く、去る時も無いのです。山河大地です。われすべからず。見聞覚知はみなわれです。見聞覚知はみな時です。時さるべからず。すでに充分。その他に何も無いじゃないか。何時でも、何でもわれの様子なので、何も探したり求めたりする必要は無い。素直に、本当にその物、その時に任せきつて、計り事をする自分から離れなさい、と言つのが真意です。



## 茶礼会

世話人・・ 最近とみに逸脱した行為が多く、震撼とする事件が続いています。それについて、不気味な心の解決策など御願ひ致します。

老 師・・ 私も驚いたのですが、保育園児の母親が、余所の子供2人を殺傷したと言うニュースを聞きました。これは大変な事です。しかし思ってみれば、人間にはこの恐ろしい凶暴性や残忍性が、生まれた時から既存しているので、このことからすれば不思議な事では無い出来事です。周知の通り、弱い者を殺傷して食い、生命を維持しなければならなかった弱肉強食の摂理があります。つまり弱肉強食そのものが進化発展だったので、そうした能力が生き物として内在していることを自覚して、その対策を早く進める事です。

ぞつとするのは、そうした残忍性・獰猛性から来る殺傷願望が、時代として精神の表層に近づいてきたと言う事です。如何に人間性が破壊されつつあるかと言う証明です。極めて真面目な人が、心の隙間からそのようなとんでもない残忍な要求が忍び寄ると、それを実行してしまう短絡性が一大事となります。人として、日本人としてこの危険で恥しいこの現実を、何としても改善する手立てを講じなければいけません。

人間になるべくして現れた人と、弱いと見たらとにかく殺しに掛かるヒョウのような、獰猛性を脱皮することなくそれらを携えて現れた者とは、心の質と内容が全然違います。

神仏に近い人と、猛獣に近い人との違いと言う事です。自律性が高く、信頼や感謝、尊敬努力を大切にし、道義を重んずることを宗として人生している人は生涯幸せです。一方ではまだまだ人間として出てくるのが早かったです。要するに自分が気に入らなかつたら直ぐに獰猛性が現れてしまい、目的の為、欲望の俥に振る舞って大事件を起こすなどは、人間にして人間ではないのです。人間が動物としての過去世の業を引きずっている以上は雲泥の差があるので、誤った自由とか人権とか権利とか、行き過ぎた個性尊重主義などは、縁によってはとんでもない人間になってしまうのです。

人間の皮をかぶり、人間の言葉を喋ると、みんな同じ人間になってしまいます。だけでも何でも有りりの時代が、こういう風にすぐラインを越えて先祖帰りし畜生道に戻る人が急増している以上は、早急に現実を正さねばなりません。

考えてもらいたいのは、昔は警察官にするにも教員にするにも調べに調べて、国法の勅使として相応しいかどうか、教壇に立つ教師として、資質や品性等、必要な条件が整っているかどうかを十分に調べた上で採用してきました。警察官が悪い事をするのは調べが足りないからです。不適格者は避けて、その大事な内容と任務の重要性をもっと中心にして人選すべきなのです。場合によっては、国民に対して人権侵害をさせない為の、大切な準備であり条件整備です。差別とか人権侵害とか言うが、国家の尊厳と公明正大な確かな内容を堅持する事が第一でなければいけないのです。そうしないと、国民を健全に護れないからです。世の中の規矩の中心を守る人は、特に人間性を十分に備えているかどうか調べて採用すべきです。つまり余りに無差別になり、善と悪と、して良いか悪いかの差別が曖昧になったから、今日のように何でも有りの世の中になったのですから。戦後教育・戦後思想の中で一番まずい状態がこの悪平等です。このままではますます悪くなって行くしか無いので、こゝろで健全な差別を打ち立てる必要があるのです。

その為には、人間の本质をもっと明確にし、国民上げて周知することです。そうすれば内在する動物精神の危険性が自覚出来て、個人としても修養の大切さを感じるはずで、それに相応しい最も道義信義と民主精神を包含した手引き書が必要です。それには「教育勅語」が一番です。素晴らしい内容であり、日本の誇るべき崇高高邁な名文です。人間性を復活させるには最適の龜鑑です。「教育勅語」の精神を一般の思潮にして行くことが一番健全で気高いかなと思つたのです。どこの家庭でも、「人様に後ろ指を指されるような事をしたらいかんぞ！ 信用は人として最高の宝だから大切にしろ！」と言うような、人として当たり前の信義を、子供達に自信を持って語れるようになれば大丈夫です。

問題解決はやはり家庭教育が原則であり、当然国是としての学校教育は国の根幹ですから、日本に相応しい精神と人間性を培うべく、礼に始まり礼に終わり、時と、処と、立場とをきっちりケジメが付けられる人になるよう、人間性を大切に授業にすべきです。

人間としての人權は平等ですが、人の内容はそれぞれで、色々の能力特技を別にしてはいるのです。前世が異なる故です。人格的にも上中下の差があるのです。もとより上根の人は信じられるだけではなく、尊敬に値し学ぶべき多くの徳力を兼ね備えています。しかし下根の者は元々危険をはらんでいる存在ですから、魂の健全化無しに知性を肥大化させると危険なのです。自律出来ない上に、却つて知性を手段に遣つて野望を果たすからです。この事はみんなが熟知しなければ、つい知性を絶対視してしまうので

す。

何故かという、欲望達成の為に知性を駆使する事で一層早く、しかも効率的に目的を果たせるからです。だから知性という道具を磨いて更なる悪知恵を増長することになるのです。人間も生き物故に過去の業を引きずっていますから、縁によって仏にもなるが、修羅・餓鬼・畜生に転じる存在なのです。だから知性と野望のドッキング以前に、道義信義を魂に敷き詰めておかなければ危険なのです。

どうあれ親の責任として、子供に対して親らしくする義務と責任が有るのです。そうでなければ子供の教育は出来ないと言う事です。そして子供らしく育てるのです。子供らしくとは、両親を信じて常に安心した精神状態であれば、素直で伸び伸びしていますから心に淀みが無いのです。これが大切なのです。心が屈折すると素直さが無くなり、不平不満が溜まるに連れて爽快感や達成感が感じられなくなり、かさかさの性格になり歪になるのです。人としての情味や感性が欠落して、人間らしい情操も情緒も無くなり自信を無くしてしまうのです。

とにかく珍しい物事には何でも興味が湧き、時を忘れて見ていたり、付いて廻ったり、したくてしたくて、うずうずわくわくしながらチャンスを待っていたりするのが本来の子供です。興味を起こしてやり出したら、何もかも忘れて夢中になる事が出来るという、人生で最も知情意が統一的で安定している時代なのです。それだけ純粹で質の高い精神状態の時なのです。この時代の、この心の状態をしっかりと育む事により、健全な魂へと向上するのです。知性を鍛える順位と度合いは二番目で良いのです。一番は何と言つても人間性であり、健全な精神と身体を十分に育むことです。

未来を任せられる次世代は、家庭、学校、社会全体の愛情と希望と責任によって初めて育つのです。物金本位の国策は、やがて心の貧しい国民にしてしまい、社会や国家から貪ることばかりの権利主張者になるのです。国家の内容品格とその未来は、人作りに重点をおいているかいないかです。それがそのまま国の将来となり社会の姿となるのです。

本来の健全な人生を送るにはどうあるべきか。それは国民一人々々が、向上心と共に自らを律する精神の有無で決まるのです。安心の出来る社会・世の中にして行くことには反対者はいないはずで、人様にこうしろとか言つと人権問題にしたりして、色々な抵抗勢力が現れますが、自分自身を律する為の人間としての努力は当然ですから、このことに反対は出来ないはずで、形式化した悪平等の今の会社

は、何でもマニュアル化しています。それで人を管理し、物を管理し、お金を管理し、制度を管理する構造になっています。他を管理する事ばかりで、自らを管理する事の大切さを誰も言わない。

大事なことは自らを健全に管理し、自らを高め、心の束縛を自ら解放する努力です。それこそ真の幸福を得る道です。要するに、本当に自己を律する力があれば、それで後はそれぞれの人生を自由に開き、謳歌すればいいのです。切りがないので、是れはこの位にします。

参禅者B・・・話が替わりますが、イノシシが出るそうですが、被害が大きくならないようにすぐに捕獲して処理するのがよいですね。

老 師・・・そうですが、なかなか利口でして、素人には捕まりません。

参禅者B・・・殺生とは何ですか？

老 師・・・命を取る事です。

参禅者B・・・人を助ける為にやむを得ず殺す場合も、とにかく殺生ですか？

老 師・・・それを殺生と取るのは小乗の小さな生命観であり戒律です。色々な命が危機的状況の場合、先ず人間を守り助けるのが自然であり、人としての道です。それが道義というものです。命なら何でもかんでも殺さないと言つのは、戒に囚われた人間不在のセンチメンタルな美しき迷いに過ぎません。場合によっては「道」「法」を破壊することになります。

参禅者B・・・と言つ事は、殺しても殺生にならない法もあると言つ事ですか？

老 師・・・その通り。殺すべき相手、殺すべき理由、殺すべき時、殺すべき処に於いては、殺すのが道であり、慈悲です。

参禅者B・・・例えばどのような時でしょうか？

老 師・・・ノミやゴキブリや鼠、ムカデや人を襲う獣でも、生命有る以上は理由無く無闇に殺すのは殺生です。ところが彼等の住むべきところに於いての話で、人の生活圏内で共存すべき生き物ではないでしょう。何となれば、精神的にも問題があるし、危険な病気に繋がる衛生上の問題を初め、人の生活を著しく損なうし、赤ちゃんや病人老人の健康や安全に直接関わる事です。ここでも人間の健全な生存が第一です。他の命を人と比べる事が可笑しいのです。命という者を何でも人と同じレベルで捉えること自体が人の命を軽視していることなのです。殺す事は決して好ましい事でも良い事でもないので、殺さずに人間社会を守る為には家の内外を整備し、インフラ整備もだから進めているのです。毒虫も毒蛾もいるのでやはり殺虫剤も畏も、時には銃も必要です。好きで殺すのではなく、誰かが犠牲になる前に、止むを得ず必要だからするのです。根本が慈悲ですから、これは殺生とは言わないのです。

参禅者B・・・殺すべき時は潔く殺しても良いと言つ事ですか？

老 師・・・そうですね。それが大事な事です。相手も殺されたくはないし、矢張り苦しいのですから、止むを得ないその時は無心に、そして苦しまないように一気にサツと「只」殺してやるのです。命を認めたり、殺すのは罪だといった念を持たぬ事です。自然災害には誰も文句が言われないうちに、一切の念が無ければ相手の恨みに取り憑かれる事はありませんし、無心にされればその様な性から脱して成仏することができるのです。殺すべき時は、命じゃ、何じゃとややこしい理屈をいれると躊躇しますので、「只」行つ事です。これが大乘の精神であり、直面した時の決意であり、慈悲です。

小乗の慈悲は大乘の破戒、小乗の破戒は大乘の慈悲とあります。可愛そうだからと言って鼠やゴキブリやムカデを人家で飼えば、自分は良い事をしているつもりでも、大乘の大きな目からはとんでも無い危険な事であり、大勢に迷惑を掛けているのです。それでもしたいのであれば、自分の無人島ですべきです。このような生命観は、慈悲でも無く善行でもなく、単に社会性が欠落した小さな同情に過ぎないのです。とにかく大きく救う時、殺生は無いのです。大乘の精神、釈尊の精神というものは、改めるべ

きものは改め、守るべきものは守る事にあるのです。そこには健全な科学性も知性も理想も思い遣りも、大勢の命を大きく活かす為に遣つかられるべきものです。だから大乘精神には自我を殺すという以外、本もと殺すという概念は無いのです。活かす為の慈悲の殺生は殺生と言わないのです。明快に合理的に対処する大乘精神は無我の精神です。無我は大我です。だから世の中が良くなつていくのです。戒とは無我が基本です。無我であるから自己を自由に律することができなのです。この要諦は坐禅にあるということです。

参禅者B・・・ 大変有り難うございました。何かすつきりしました。

参禅者C・・・ 先日中学一年生を対象に、子供の将来について如何にあるべきかと言つ問題で、学校に行つたのですが、子供じゃなくて先生が始末悪い。まずまともな挨拶が出来ない。服装も先生とは思えないし、校長室への出入りでも挨拶が無い。先生がいい加減な状態なので、生徒も大半がだらしがなかつたですね。これでは子供が駄目になつても当然ではないかとかっかりして帰宅しました。あれでは確かな教育が出来るはずが無いですね。

老 師・・・ そうです。私もそう思います。教育は百年の計、千年の計ですから、先生の質と言いますか、或る程度崇高な人格と実地の為の内容がなくてはなりません。本当によく選んでしないと、日本の将来全体が掛かっているのですから。

今のように父兄から尊敬されなければかりか、不自然でなつてない、と言われるようでは、教壇に立つ資格は無いのです。人の師に成ると言う事は、その人の生涯に関わる根本を指導することです。だから聖職者なのです。その自覚さえ無いような者が、先生なんてとんでもないことです。百叩きして教壇から追い出すべきです。か様に崩れた教育を受けた者達が今、親ですから、学校家庭共に子供を健全に育てられるはずは無いのです。だから人を刺し殺し、親をバットで殴り殺すような者が育つのです。

次世代を育てるシステムとしては、絶えず教育の健全化を計る事です。教育内容と先生の質の向上を計ろうとするならば、現代教育だけではとても不充分です。徳性を育み、徳行善行を為す事の大切さを、教師自ら率先垂範する。このような教師を育み育てるには、行を中心にした伝統ある確かな宗教の力も活用すべきです。

これから生み育てようとしている若い夫婦は、実はこうした現実にぞつとされていると思います。しかしながら、子育てはそんなに難しいものではありません。赤ちゃんの要求をよく見て、その内容が見抜けさえすれば、今必要として要求している事に、愛情を持って丁寧に応ずるだけです。それ以上に余分な事をしたりしないことです。何故なら、赤ちゃんにはその子のリズムと速度と摂理があるからです。それを大切に育めば良いのです。必要要求に対して一〇〇%答えて行けば良いと言つことです。赤ちゃんは常に要求という形で、成長情報を発露しておるので、それを温かく親密に受け取り、それ的確に応じればよいのです。そのためには健全な母性本能がきちつと発露顕現していなければ、赤ちゃんの発達情報を見抜けません。やはり人間としての成長向上が基本だと言つ事になります。であれば、全然心配はいらないのです。

こうした環境下で円満に育ち、成長とともに教育の面白さ大切さに天分を見出した人が教師になるのが最善なのです。やはり家庭であり、両親から始まると言つ事です。社会や国家が、それを擁護し助けて初めて国の将来が約束されるのです。ですから国家と国民と家庭がしっかり信頼しあえるように、道義、信義を培つ事が重要ポイントです。

今の現状打開の高い即効性ある解決策は、正直言つて有りません。此処まで乱れてしまつと、する側もされる側も、手を付ければ忽ちそこから次の問題が発生する、と言つ危機的状态なのです。だとすると、唯一出来る事は家庭レベルで対処することしかありません。先ず親が、信ずるに値する師を尋ね、

或いは先輩の指導を仰ぎ、魂の研参を怠らぬ事です。そして親らしく、信義を大切にされたケジメ有る家庭を形成する事が第一です。

今日の忙しさは既に人間破壊の元凶であり、金銭物質主義に乗せられ、否応なしに走らされています。純真な子供達もこれから、それ以上加速した社会に処して行かねばなりません。何の為の人生かと、その将来を考えてやると空しくなります。青少年が、健全な理想や夢が描けない社会や環境であってはならないのです。心の中に、向かうべき将来が無いと言う事は、生きていく意義が無い、既に良き人生などはない、と諦めた状態と言う事です。ここをみんな理解していないので、彼等のとまどいと不安を受け取れないのです。非行化するのは、そこから来る焦燥感や不安が、訳もなく不満となり怒りとなり自暴自棄にも成っていくのです。打てる手段はただ一つ。親の愛情と、それを伝える親自身の生活態度と、深い人間的道義感や信念を実践するだけです。本当に空しい助言になりましたが、自らの向上心を大切にして、弁道精進して頂きたいと願うばかりです。では。

世話人・・・子供達に人間の道を教える育てるためには、まず親が精進努力をして、率先垂範を宗とした家庭生活を通して、そこから始まると言う事ですね。

老 師・・・その通りです。

世話人・・・他に何か質問は無いですか？ 無ければ終わりにします。有り難うございました。

平成十八年二月十八日